

---

# ペルソネル スケープゴート

イロル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ペルソナル スケープゴート

### 【Nコード】

N6681G

### 【作者名】

イロル

### 【あらすじ】

不登校で引きこもりの長瀬優也は、現実復帰する一つの方法を手に入れた。P Sという、インターネット上の仮想空間にて学校生活を送ることになるが、そこで彼を待ち受けていたのは、全く新しい生活と苦闘だった。

## 私の言葉

仮面を手を取った。

私の素顔は隠されて、邪魔される事もない。

もう苦しむこともない。

そして、私は自由になれると思った。

それなのに、私はそれを許されない。

呪われている。そう感じてしまう。

そこで気づいたのだ。

私は、呪われた仮面をつけているのだと。

ペルソナル スケープゴート

## プロローグ「僕は自己紹介をする」上

家族が完全に寝静まった午前二時。僕、長瀬優也はパソコンのディスプレイを真っ直ぐに見つめていた。プログラムのダウンロード完了を告げる効果音が鳴り、僕は閲覧していたブラウザを閉じて、新しくできたファイルをダブルクリックする。

ファイルが展開され、大画面表示でプログラムが起動し始めた。P Sというロゴが真ん中に現れて常時され、続いて可愛い女の子のキャラクターが、その右下にキラキラと魔法の様なエフェクトで現れた。

『初めてのご利用ですか？』

アニメ声優の様な甲高い、可愛い女の音がヘッドホンを通して僕の両耳を刺激した。ただの登録画面にそこまでするのかと、僕は驚いた。でも、そんな事で戸惑っている場合ではない、僕はディスプレイに表示された【はい/いいえ】という選択肢から、【はい】を選んだ。

『ご利用ありがとうございます。まずはこちらを入力して下さい』

次に現れたのは入力画面だ。

名前、ふりがな、年齢、性別等々、を入力し、最後に今朝からずっと考えに考えていた、ハンドルネームを入力する。

【七瀬空也】

ハンドルネームの癖に、長瀬優也という本名になんとなく似ているのは突っ込まないで欲しい。色々な名前を考えた結果、自分の名前とかけ離れすぎていると、呼ばれた時に鳥肌が立つという事が、実験からわかったからだ。

そして何とか、二文字を変えるだけという妥協案にたどり着いた。

これは、その実験の成果なのだった。実際早口で呼ばれると、本名に聞こえなくもない。

だから、ハンドルネームとして機能しているかと聞かれると、何も言えないのだけれど……

『七瀬空也様、ご登録ありがとうございます。次にP Sアバターについて説明します』

前言撤回、やっぱりどんなHNで呼ばれても、僕は鳥肌は立つ仕様になっているらしい。

『P Sアバターは仮想学園でのあなたの姿を表す、いわば分身の様なものです。様々なバリエーションの髪型、目、耳、鼻等のパーツを組み合わせて、魅力的なP Sアバターを完成させてください』

来た。僕は予めP Sのホームページで公開されていた、『アバター作成体験』で自分の分身を既に完成させていたので、そこで表示されたパスワードを入力するだけで、この段階はクリアできる筈だ。ちなみに、アバター作成にも相当な時間が懸かっているのは言わずもがなだ。

ランダムに並べられた十文字の半角英数字を入力し、『これでいいですか？【はい/いいえ】』という確認の表示を一瞥し、慎重にマウスを動かして、『はい』をクリックした。

『パスワードの認証を完了しました。こちらが設定されたP Sアバターです』

声と同時にディスプレイに表示されたのは、本当の僕の姿をほんの僅かなさじ加減で変えただけの、ほぼ自分そっくりのキャラクターだった。これも名前同様、自分とかけ離れた外見を作ることにとつもない罪の意識と、恥ずかしさを孕んだ違和感に苛まれたからだ。

ただ、唯一努力したと言えるのは、普段かけている眼鏡を外した事だけだろう。

そのせいで、僕より少しだけ明るそうに見えなくもない。本当に

どうでもいいけど。

『これからP Sについての簡単な説明をします。もし、スキップしたい場合は【SKIP】を、説明を受けたい場合は【OK】をクリックして下さい』

僕は説明を受けなくても何となくはP Sについて理解しているつもりだ。マウスを繰り返して、カーソルを【SKIP】に合わせる。でも、そこで僕はとまった。

一応、聞いておいてもいいんじゃないだろうかという気持ちが心を満たしていく。

そして僕は【OK】をクリックした。自分の用心深すぎる性格に重いため息が出る。

『それでは簡単に説明を。P Sとは、インターネットのサーバー上に存在する仮想の学校の事です。初等部、中等部、高等部に分かれており、各学校で卒業要項を満たすと、各学校の卒業資格が与えられます。この資格は政府の認可の基に作られた【学習援助プログラム】の一貫であるからこそその権限です』

可愛らしい声での長い説明の後。【次に進む】という文字が表示された。

ここまでの説明から分かるように、僕は現実の学校に通っていない。その理由はさておき、僕がこのシステムについて知ったのはつい最近の事だった。思い出すのも辛いけれど。

いつもの様にゆっくりと起きた朝、僕が食卓に向うと机の上に一枚のチラシが置いてあった。

「優也、ちよつとこれ見て……」

複雑な表情をした母さんから受け取ったチラシには、『P Sプログラム始動!』というデカイ文字が華やかなイラストやポップに囲まれていた。

「P S?」

「その下のところ、ちよつと読んでみて」

「えっと……」

『家に引きこもっている諸君に朗報!!』 何だろっ、急に続きを読みたくなくなってきた。しかし、チラシの影から見える母さんが、切実な表情をしていた為僕は視線を戻すことにする。

『学校に通わなくても、卒業資格が取得可能、家にいながら学校に行ける夢のツールが遂に完成!』

信頼度が低いような……と思いつながら、僕はその夢の言葉に心を動かされていた。

「優也、あなたも卒業資格欲しいでしょ?」

僕が高校を中退したのは一年の時だ。入学式に熱を出して欠席した僕は、初めての登校日『この人、誰?』という眼差しを新しいクラスメイトから注がれた。

用意されていると思った自己紹介の機会は、僕の存在感が薄いから存在しなかった。

だから僕が二日(土曜と日曜)悩んで考えた自己紹介スピーチは、僕の口から出ることは無く

そして、いつの間にか僕は学校に行かなくなっていた。

何でそんな事になってしまったのかは、今になってはどうでもいい事だと僕は思う。ただ、僕の中には一片の悔しさが残っているた。

「欲しいよ、そんなチャンスがあるなら、もう一回学校に行ってみたい」

その時の言葉は、僕の真実だと思う。でも僕には自信が無くて、少し考えさせてと言ってそのチラシを受け取った。

その日はまだ普通の高校生なら。春休みの初日だったと思う。悩める期間はそんなに長くない。すぐにホームページを開いて、P Sについて調べに調べた。

様々なサイトで、その全貌をあらゆる角度から推察して、本当に国の認可で卒業資格がもらえるという事もわかった。P Sには参加する意義がある。

そうして、遂に行動に至った今日は5月。

始業式コンプレックスを持った僕は、あろう事かまたとない機を逸していたのだった。

慎重すぎる、慎重すぎるよ、僕……

それでも諦めずに、妹に手伝ってもらってアバターを作ったり、名前を考えてもらったり、そんなこんなで今はもう登録を終えたところだった。

そんな事に思いを馳せながら、僕は【次に進む】をクリックした。

『あなたはこれからP Sの中で三年間の学校生活を送っていただきます。もちろん途中で休学、転校して頂いても構いません。重要なのは、こちらの卒業要項を満たしていただければ、卒業資格をお渡しするという点だけです。卒業要項に関しては、お持ちのパンフレットをご覧ください』

またメッセージが止まる。

僕は机の上に置いてあったP Sスターターセットの箱から分厚いパンフレットを取り出す。

卒業要項のページだけは、とても難しそうな事が書かれていて、一度ぱらっと呼んだ時に僕はスルーしていた。明らかに他のページと、書式が違うし字の大きさも違うせいだと僕は思う。

改めて見直すが、特に気になる所も無い。というか、卒業要項なんてものは、僕の人生で初めて目にするもので、それがどうかんたという感情は発生しようが無かった。

ただ何となく、学校に行っていれば大丈夫だろうと僕は考え、説明を進めた。

『最後に、あなたは五月からの参加という事なので、他校からの転校生という扱いを受けます。クラスについては当日言い渡されると思います。あなたはこれから七瀬空也として生活をするという事を忘れないように、お願いいたします』

右下の説明キャラがお辞儀をして、長々続いた説明がようやく終わった。

ディスプレイにカレンダーの様な物が表示される。何ていうか、RPGのステータス画面の様だった。そのステータス画面の右下に、『登校』と書かれた大きなアイコンが赤く点滅していた。

カーソルを合わせると、『明日からの登校の際にはこのボタンを押してください』という説明が表示された。

その点滅を見ていると、僕の心がときどきと脈を打っているのがわかった。

明日から、僕は一度逃げ出した学校に通うのだ。何が待っているのだろうという期待と、しっかりやれるのだろうかという不安が、僕の中で駆け巡る。

そんな時に、ぴろりんという音がヘッドホンから鳴り響いた。

それは僕のパソコンにメールが届いたという事を知らせる効果音だった。ステータス画面の中に、先程まで無かったメールのアイコンがくるくる回っている。

何だろうと思い、僕はそのアイコンをクリックする。

そのメールには、こう書いてあった。

『P Sによろこそ、初登校を明日に控えるあなたに朗報があります。今なら、無人学校体験ツアーにご招待。参加される場合はこのメールの最後に点滅している、『裏登校』のボタンをクリックして下さい』

ごくりと僕の喉が鳴る。本当に公式サイトからのメールなのだろうかという感想と共に、明日の登校の前に体験しておきたいという願望が、じわじわと沸いてくるのがわかる。

僕はいつの間にか、『裏登校』という怪しいボタンを、慎重にクリックしていた。

『登校スタンバイ、スターターセットに付属しているゴーグルをかけてください』

ゴーグルというのは、仮想空間に現実身を帯びさせるための装置で、脳波と反応して画面に映るものを実体化させ、自分の意思をアバターに反映する。分身と繋がるための装置だ。言われた通りに装着すると、目の前が真っ暗になった。

『脳波の発生をキャッチしました。ビジョン、繋がります』

暗闇だった視界が、徐々に開けていく。光が差し込んでくるわけじゃなく、暗闇から新たな暗闇が現れる。違うのは、月明かりに照らされた風景が、少しだけ蒼く染まっている位。

これが、P Sの仮想世界……その世界は現実と寸分変わらない姿を持っていた。

「すごい……」

気づくと僕は、何らかの建物の屋上にいた。

爽やかな夜風が吹いていて、ひんやりと涼しい。この五感も仮のモノだろうけど、P Sはとてモリアルに僕に感じさせていた。

こんなプログラムを作る人間が、この世に本当にいるのだろうか。

僕は外の眺めを見ようとフェンスに近づこうと思った。すると視界が移動していく。ゴーグルが僕の意思をキャッチして、アバターを動かしているようだ。どんな技術だよ……

フェンスから見える風景は、ごく普通の夜景だ。

でも、何故屋上に現れるのだろうか。普通、登校といえば門からなのでは？ と考えて自分が『裏登校』をしたのだと思い出した。確かに、屋上からの登校は裏っぽい気がする。

僕は目的を果たす為に、屋上を後にした。

階段を下りる音が、校舎中に響いていく。人がいる気配の全く無い学校というのは、とても寂しい物なのだと思つた。色が無くて、光が無くて、音が無い。学校の怪談が生まれるのも無理がない気がした。そう思つた瞬間、早く帰ってしまいたいという気持ちに摩り替わっていた。様子見の探検のつもりで来たのだが、僕は何て

情けない奴なのだろう。

とりあえず自分のクラスになるであろう、一年生の部屋を探す。そういえば、今年から始まったのだから、この学校には一年生しか居ないのか。

そんな感想はどうでもいいとして、僕はやっと一つの教室を発見していた。

入り口に釣られた表札には、『一年W組』と書いてあった。W組って、この学校には一体幾つのクラスあるのだろうか。と思ったのだけれど、次に発見したのはF組で、FとWの間のクラスは無かった。何でWだけ飛んでいるんだろうと思ったけれど、僕は深く考えないことにした。考えてもわからないだろうし。

自分の教室候補を発見した僕は、何となくの満足感と、溜まり続ける恐怖感を抱えながら、出口を探していた。というか、帰る方法を探していた。その位調べておくべきだったのだろうか……いや、とにかく早く脱出しないと。

またも当ても無く歩き回ること数分、僕は靴脱ぎ場を発見した。ここからなら帰れそうだ。

履き替える靴は持っていなかった為、上履きのまま外に出る。これで学校から出れるはずと思ったのだけれど、僕はそのまま運動場に出てしまった。

体育の授業もあるのだろうか、運動場に入れるのも当たり前だろう。と今さらながらに思う。

じゃあ次は門を探そうと思い、歩き出した時だった。

「女の子……？」

の様に見える人影が、運動場のど真ん中で何かをしていた。女の子だと断言できる理由は、服装が遠目で見てもスカートに見えた。そし、そのてスカートがヒラヒラと舞い上がっていたのだった。

僕は目を細めて様子を伺っていると、テン、テンツという音を立ててサッカーボールが転がってきた。女の子の物だろうか、この状況ではそうとしか思えないけれど。

見つかったら不味いのではと僕は本能的に感じていた。ボールを取りに来る前に逃げねば。

しかし、女の子は僕に気がついたのか、ボールを追いかけるどころか僕から逃げて行った。

「あれ？」

先生と勘違いしているのかな、と思いながらサッカーボールを見つめる。

あれ？ ちょっと待てよ、あの子ならここから帰る方法を知っているのではないだろうか。これでもし、門を潜っても何も起こらなかったら、僕はここで後何時間も一人で過ごす事になる。

それは駄目だ。ただでさえもう足腰がガタガタと恐怖に脅えていつていうのに、そこに後何時間も一人でいるなんて、僕にとっては狂気の沙汰だ。

「ちよつと、帰る方法を教えて欲しいんだけど！」

僕は叫びながら、走り去っていく女の子を全力で追いかけた。現実でこれをしたら、確実に周囲の人たちに押さえ込まれて補導されるだろう。でも、今は僕と、多分彼女しかない。なら、誰にも見られる事も無いはず、と強引に自分を納得させた。

しかし、彼女の走りは予想外に早く、僕の足ではとても追いつけそうになかった。

あれ、これって仮想世界のはずなのに、何で身体能力に差があるんだろう。確かに、現実の僕だったら少し走っただけで息を切らしているだろうけど。

やはり、僕の体力はその程度だったみたいで、いつのまにか息を整えていた。しかも現実の世界にいる僕も、同じ様に息を整えている。

僕が仮想空間を、現実とリンクさせているからだろうか。だから、脳が身体にそういう効果を及ぼしているのか。

「もし、こっちの世界で殴られたら、僕は頬が痛むんだろうか……」  
そんな事を呟いた後、僕は周りを見渡した。広いグラウンドに今

は僕しかない。これが明日になったら、僕のように学校に通えなくなつた生徒達で一杯になるのだろうか。

そしてその中で、僕は友達と呼べる存在を作る事ができるのだろうか。そんな事を考えながら、僕は気づくとさっきのサッカーボールを拾っていた。

もしかしたら、あの子は初めての友達になつていたかも知れない。一対一の状況は僕にとっては楽だと思ふし、女の子と話すのは苦手だけど、暗いし意外と何とかなるんじゃないのだろうか。そうだが、そういえば仮想空間だし、

「それ、私のなんだけど……」

「あいつ？」

新発見。僕は急に後ろから肩を持たれて話しかけられると、パニックになる事が判明した。

恐る恐る振り返ると、そこには現実世界で見る女の子の姿と全く同じ、CGとかではない、リアルな女の子の姿があった。

「だから、そのボール私の……」

どうやら、彼女は僕がボールを盗つたのだと思つたらしい。

「ごめん、別にこれを盗ろうとかは思つてないからっ」

何を慌てているんだろうか僕は……ただボールを返すだけでこの醜態とは我ながら泣かせる。

ボールを受け取ると、女の子はそれを足元で弾ませた。

光が無いために月明かり程度の灯りしかなかったけれど、僕は彼女の姿を何とか見ることが出来た。長い黒髪を一つに束ねポニーテールにしている、それが風で少し揺れている。

顔つきは少し眉がきりっとしていて、何と云うか力強い印象を受けた。

そういえば、彼女はサッカーをしていたのだ。力強いはずだ。

「こんな時間にここで何をしているの？」

「えっと、僕は、その」ってそこで何で言葉に詰まるんだよ僕は、普通の会話じゃないか。

えつと何て言ったらいいんだ、僕はただ偶然通りすがってついでで言い訳してるんだよっ、正直に、僕は明日からここで通うからその下見に、よしこれでいこう。

「門は閉まってる筈だから通常ログインはできないし、もしかして不正アクセス？」

（ ん？ ）

彼女は今何て言った？ 通常ログインができないというのは、登校ができないという事だろうか。不正アクセスという単語が僕の肌を粟立てる。僕は今いけない事をしているのだろうか。

「もしくは、あなたもメールをもらった口？」

メール、じゃあ彼女も、ここにメールで来たということか？

「メール、そう僕もメールでここに来たんだ、それでここから帰る方法がわからなくて、それであなたを追いかけたんだけど全然追いつけなくて……」

「急に早口で喋りすぎ、とりあえず、あなたもメールでここに入ってきたのね？」

「あ、うん……ごめんなさい、急に驚かせて」

自分の口から急に溢れ出た言葉に、僕自身も驚いていた。心に溜まっていた物がずると吐き出されていく。

「それで、あなたは帰り方がわからないんだ」

「はい、知っているなら教えて欲しいです」

僕は今すぐベッドに潜って寝てしまいたいと思っていた。この状況が情けなくて、恥ずかしいから、

「あなた学校では見かけない顔だけど、もしかして転校生？」

「え、何でそんな……」

「だって、あなたみたいは何の特徴も無くて地味な容姿のAvatarなんて、この学校には一人もないよ。だからそう思ったんだけど……もしかしてクラスメイトだったらごめん」

これ程までショックな事を立て続けに言われると、逆に清々しかった。言ってる事は全部当たってるし、何も言い返せないけど、何

というか、もつとやんわりと言って欲しいというか……

「そうです、僕は転校生です……」

「やっぱりねっ、私の名前はマイ。あなたの名前は？」

「ながっ、違う　ええっと、七瀬空也って言います」

「やばい、危うく本名を言ってしまいそうになった……ハンドルネームが自分の名前に近すぎると、逆に間違いやすいのか。いや、そんな事は当たり前だる僕……」

「ふーん、空也君ね。今、暇？」

「いや、さっき帰り方がわからないって話をしたばかりなんですけど、というか、今何時かわかっていますか、マイさん？　もうとっくに寝る時間ですよ？」

「何か用事でもあるの？」

「いや、そんな悲しげな表情をされても……確かに何も用事はないですけど。早く寝ないと明日の朝が辛いというか。」

「少しだけなら、時間ありますけど……」　「いや無いけどね。でもそこまで言われて簡単に断れる程、僕はできた人間ではなかったみたいだ。」

「じゃあさ、パス練習しよ、パス練習」

「パス練習って、サッカーボールでするパス練習の事だろうか。はつきり言って僕はサッカーなんて学校の授業でしかした事がない。そしてまともにできた記憶も無い。」

「じゃあ行くよっつ」

「はいっ、お願いします」

でもパスだけなら、僕にも簡単にできるかもしれない。地面を転がるボール位、僕でも足で止めれるはずだ。それにもし止めれなくても追いかければいい。

そんな思考の中、少し離れた所にいたマイさんが、助走をつけてボールに向って走っていく。あれ、パスってそんなに勢いとかいら  
ないんじゃない……

「それッ」

マイさんの足から蹴り上げられたボールは、僕の予想した直線的な動きではなく、真つ黒な夜空に白線が弧を描いていた。多分これはロングパスという物ではないだろうか。

多分、僕はこれを胸で受け止めるか、足で受け止めるかしなければいけないのだろう。それ位は、サッカーのテレビ中継で見たことがある。でもそんな事が僕にできるはずが、

「な」

気がついた時には、僕はグラウンドに横になっていた。目を開けるとそこには心配そうな顔をした、可愛い女の子がいた。

「大丈夫だった？ ごめん、サッカーした事なかったんだね」

「えっと、マイさん、僕にはちょっと無理でした」

目を潤ませたマイさんの表情は、男だったら誰もが魅了されてしまう位の魅力があった。

「あの、帰る方法、教えてもらってもいいですか？」

「それは、まずゴーグルを外して、ディスプレイに表示された【帰宅】を押せば大丈夫だよ？」

「ありがとうございます。じゃあ僕はこれで……」

「ちょっとだけ、あとちょっとだけいい？」

「別にいいですけど……」

マイさんは僕の腕を掴んで、真剣そうな顔でそう言った。

「空也君、学校での生活は、楽しみ？」

「えっと、一応……」

「だったら、私から一つアドバイスするね。笑う事忘れちゃ駄目。さつきから空也君、ずっと笑ってないよ」

笑顔のマイさんは、僕の腕を離して、その代わりにほったたを掴んだ。

「ふあ、ふあわかりました……」

無理やりに笑顔に変えられた僕は、加速する鼓動を止められなくなっていた。

「あの、もう、いいですか？ 恥ずかしいです……」

「恥は捨てなさい恥は。笑ってないと、みんなから見捨てられちゃうよ?」

ようやく僕の頬を開放してくれたマイさんは、寂しそうな顔をして、すぐに笑った。

「空也君、私も少しだけ楽しかったよ」

一日で、こんなにも女の子と話したのは初めてではないだろうか。でも、意外と僕喋れるんだ。これは少し、自信を持っていいのかも知れない。

そして、今教えてもらった『笑顔でいること』。僕は今日マイさんに会えてよかった。

僕はそんな感慨を味わいながら、ゴーグルに手をかけ、ゆっくりと外した。

目の前にあるディスプレイには、未だに写っているマイさんの顔があった。

画面で見ても、とても可愛かった。でもあれは、実際の顔じゃなくて設定されたアバターでしかないんだった。

そして名残惜しみながら、僕は帰宅のボタンをクリックした。すると画面が真っ暗になり、前のステータス画面の様なものに戻った。「ふう……」

身体中の力が一気に抜けて、僕は椅子から立ち上がりベッドに飛び込んだ。

もう少し遊べたら、マイさんと友達になれたらどうか。

僕は、ひりひりする頬をさすりながら、眠りにつくことにした。

## プロローグ「僕は自己紹介をする」中

次の日の朝、僕の目覚めは最高だった。

とても清々しい朝を迎えた僕は、少しだけ霞んだ意識の中ベッドから起き上がった。

いつもの癖で、起きてすぐにパソコンを起動してしまう。機械音が漏れ出し、ゆっくりとパソコンが立ち上がる。そのままブラウザをダブルクリックしそうになるのを抑えて、P Sのアイコンを起動する。

欠伸をかみ殺しながら、目の前に映ったスケジュール表を眺める。今日はとうとう月曜日、これから僕の学校生活が始まる。

何が待ち受けているのかはわからないし、これからどうなるのかもわからない。

だけど僕の中に、わずかだけど小さな希望が確かにあった。それは昨日、偶然に出会った女の子との会話。

それだけで、僕は早く学校に行きたいと思える様な気がした。机の上のデジタル時計を見る。登校にはまだ早い時間だ。朝寝で、夕方起きていた僕の生活時間は、最近の矯正のお陰で何とか直っていた。

矯正というのは、『起床時間になったらどんな手段を使っても起こしていい』というルールを、妹に与える事でクリアした。寝る時間に関しては、『十二時を過ぎても起きているのを見つけた場合、僕は何でも言うことを聞かなければならない』というルールを作った。

そんな事をしないと、僕は一年間かけて培ってしまったパソコン依存症から抜け出すことはできなかつたんだ。

「裕也、朝ごはんよ〜」

母さんも、今日が初登校だという事を知っている。父さんは遠く

で単身赴任をしているから、今の長瀬家は、僕と母さんと妹の三人暮らしという事だ。

ステータス画面を一度閉じようとすると、画面にメールのアイコンがくるくると回っていた。

またか、と思いながらクリックすると、そこには初登校のスケジュールが書いてあった。

登校した後、すぐに職員室に向ってクラス発表を受け、その後、担任教師と一緒に入室。その後は、六時間の授業を受けて帰宅。そして学校の地図が添付してあった。

頭の中で想像しただけで、身体が硬直する。

また僕は、クラスの空気になってしまうのではないかという、大きな不安が身体に押し掛かってくる。

考えているだけで膨大な負荷がかかって、頭がフリーズしそうになる。僕はベッドに飛び込んで、布団を被った。温かな誘惑に、居心地が良くなる。

「あれ、何でまだ寝てるわけ？」

ピクツ、と身体が電気が走ったかのように大きく震えた。

まずい、すぐに起き上がって意識がある事をアピールしないとぐえあああ……

「まさか登校初日に寝過ぎすなんて、お兄ちゃん馬鹿っ？」

どすんどすと、妹がベッドの上を跳ねる、もとい、僕の身体を両足で踏みつける。

「起きてるから、起きてるからもうやめてっ……………」

「あ、起きた。早くご飯食べに来ないから、心配したじゃんか」

ぶつぶつ言いながら部屋を出て行く妹。一応念のために、僕の身体を心配してくれているであろう人たちに説明すると、妹はまだ小4なのでそこそこのダメージで何とかなっています。

その代わり、今みたいに丸くなっている時はいいけれど、仰向けになってる時に腹を踏まれると激痛が走るのはご愛嬌。そのせいで、今では朝すつきり起きれる様になりました。

半分は生活習慣。

半分はトラウマである。

リビングに行くくと、味噌汁やら白米やらが暖かな湯気を立てていた。先程、僕をぼこぼこにした妹は、何もなかったかのように自然に座って食事をしていた。

「裕也、いっぱい食べなさいよ。元気ないと、できる事もできなくなるからね」

そういつて、目の前に米をもりもり盛られた茶碗が置かれた。これを朝一から間食しろと……小さい頃から少食の僕には厳しい量だ。それでも断ることができずに、僕はゆっくりと小さな胃袋に押し込んでいった。

途中から隣の妹が、手助けのつもりか僕のおかずを詰まんでいったせいで、僕は白飯だけを味付けなしで食べる羽目になった。ぐっ……

「ごちそう、さまでした……」

「じゃあ、行ってらっしゃい！」

行ってきますと言って、僕はリビングを出た。

気持ちの問題だけど、僕は歯を磨いて、髪を整え、普段着に着替えてディスプレイに臨んだ。

ステータス画面に浮かぶデジタル時計が、刻々と時を刻んでいる。もうすぐ登校時間が始まる。これから僕は、学校に通うんだ。

ゴーグルを手にとって装着する。二回目でもまだ装着感が慣れないが、いずれ何も感じないほどに慣れていくのだろう。

マウスに手を添わせ、僕は一思いに【登校】をクリックした。

真っ暗になっていた眼前に光が満ちて、風景が広がる。それは昨日は見ることはできなかった、桜の木が道を彩る一本道。これは、全校生徒共通の通学路なんだろうか。

僕は周りを見ると、次々に生徒達が登校を始めていた。仮想世界に入るときには、身体が下から順に現れてくるのか。

「おっす、おはよう！」

「ひいつ」

いきなり肩を叩かれた僕は、昨日と同様身体をびくりとさせて飛びのいた。

振り返るとそこには誰もいなくて、その代わり僕の前を颯爽と走っていく男子生徒の背中が見えた。誰にでも挨拶をする気さくな人なのだろうか、肩から提げているスポーツバッグが、体育会系の雰囲気を感じさせる。

凄く明るそうなのにここに居るのか。

てつきり僕は、自分の様に臆病な人ばかりが集まっていると思っていたのに。改めて回りを見ると、本当に色々な外見をしたアバター達の姿があった。

性格はわからないけれど、僕とは違う、様々な人たちがここにいるのは間違いないと思った。

ようやく僕は通学路を歩き出した。

何人が連れ立って歩いている生徒を見る。中心にいるのは、天子の様な笑顔を湛えた女子生徒だった。周りには何人もの男子生徒が取り囲むようにして歩いている。僕もあんな風に、友達と学校に通える様になるのだろうか。

校門を通り、生徒達が自分達のクラスに分かれて入っていくなか、僕はメールに添付されていた学校の地図を開いた。それでも僕はいつの間にか学校で迷っていた。僕は地図があっても遭難するのか……「君、もしかして転校生か何かかい？」

僕が廊下をうろろろしているのを見かねたのか、またも知らない男子生徒が声をかけてきた。いかにも真面目という感じのアバターで、しかも眼鏡までつけている。

「えっと、はい、職員室を探しているんですけど……」

「それならこっちだ。ついてきなさい」

ついてきなさい？ 一応僕と君は同じ年齢なんじゃ……なのに、何で僕は命令口調で言われているのだろうか。その偉そうなそぶりに、僕は小学校時代の学級委員の事を思い出した。人として一つ上

の地位にいと、言葉遣いも偉くなるものだ。

と思いつつも、僕は黙って付いて行くことにした。というより、もともと人に文句を言えるような性格じゃないのだけれど。

「ここだ。もし一緒のクラスになる事があったら、よろしく頼むよ」

「こ、こちらこそ、ありがとうございます」

そう言つて、真面目そうな男子生徒は去つていった。

彼は意外と親切で、いい人なのではと思った。今時、親切に道を教えてくれる人なんて、現実では珍しい。

職員室に入ると、そこには忙しそうにする先生達の姿があった。

P Sは本物の教師が雇われて、実際に授業をする。その辺りも、このプログラムが認められる理由の一つなのだろう。

僕の入室に気づいた先生達のアバターが僕を注視した。ぐっと緊張が身体を固くする。でも、ここはしっかり挨拶をしないと。

「お、おはようございます、転校生の、七瀬です」

すると一人の先生がこちらに歩いてきた。僕の担任だろうか。

「七瀬くんおはよう。今日から君の担任になる渡良瀬だ、よろしく頼むよ」

渡良瀬と名乗る男は、僕に一枚のプリントを渡した。

「君のクラスはA組だ。それは生徒の座席表だから、それを使ってクラスメイトの名前を覚えるといいよ」

三十人ほどの名前が書かれたそれを見て一気に緊張が増す。こんなにも生徒がいるのか。

「渡良瀬先生、これ前の課題です」

僕と先生が同時に振向く。そこには黒い艶のある長髪を肩まで垂らした女子生徒がいた。真っ白く透き通る様な肌をしていて、近くで見るともおこがましい位に眩しい。しかし、目が肉食動物のそれだった為に、僕は一瞬目があつただけで見れなくなつてしまった。

「おお加藤、ご苦労様。ちょうどいい、この子は前に言つてた転校生の七瀬だ。教室まで連れてつてくれないか？」

「わかりました」

加藤と呼ばれた女子生徒のきりつとした目が僕を見据える。

上から下まで一瞬にして見られたかのような感覚が僕を襲った。

「行きましよう?」

「は、はいっ……」

加藤さんは僕の少し前を歩いて、僕をA組の教室まで案内をしてくれた。その間、会話を試みようとしたけれど、結局何も言えずに教室に着いてしまった。

そしてそのまま、加藤さんは教室に入ってしまった。

開かれた扉から見える風景は、一昔前に僕が大きな苦痛を感じてきた空間だ。

生徒達が溢れた室内は見えない圧迫感に満たされて、僕を押し返そうとしている様にも感じる。これは僕の妄想なのだろうけど、身体が反射的にそれを受け取ってしまった。

「君、教室に入らないの?」

「ばっ、と声のした方に振向く。髪を左右で縛った小柄な女子生徒がいた。しかも飛び切りに可愛い。何で可愛い人しかないんだろ、やっぱり自分で好きに作れるからか?」

「多分、クラスメイトなのだろう。僕が教室を塞いでいて邪魔で、声をかけて来たと。」

身体を翻して、入り口を開ける。

「おもしろい、君つてもしかして転校生くん? 教室に入りなよ」

「え、え、え、え」  
背中を押されて教室に入れられる僕。しかも心の準備が何もできないまま。

「この子、転校生みたい、みんなよろしくしてあげてね」  
名前も知らない女の子が、わざわざ僕の事をクラスメイトに紹介してくれた(?)のだろうか。

そのせいで、急に僕の周りには十人くらいの人だけだかりができた。

「ねえ、何て名前?」

「転校生ってうける、何で四月から入学しなかったの？」

「お前スポーツやるか？」

名前も知らない人たちが、僕に次々に声をかけてくる。

「あだし、上月里桜（うづみ さくら）って言うの、よろしくね」

さつき僕を紹介した、髪を左右に縛った女の子がさりげなく自己紹介した。眩しいばかりの笑顔の上月さんは、小さく手を振りながら人だかりから抜けていった。

慌てて手を振り返す僕。

「あ、里桜なんか怪しい」

「おい、知り合いか？」

「ええと、さつき知り合ったばかりなんですけど……」

増え続ける質問と、視線に耐え切れなくなった僕は、それから先生が教室にやってくるまで、冷汗を流しながら笑顔でクラスメイトに対応し続けた。

「ええと、今日から、このクラスで一緒に勉強する事になりました、七瀬空也といいます。どうかよろしくお願いします……」

ぎこちなくニコリと笑う僕。そんな機械の様な僕の笑みと、何の面白みも無い自己紹介に、クラス中が一瞬だけしんと静まりかえった。

さつきまで上手いききかけていたのに、こんな所で躓きたくはない。でも、どうすれば。

と、そこに一つの拍手が始まった。思わず誰が拍手しているのか探してしまう。

すると、次第にクラス全体が拍手をしてくれていた。

何が起きたのだろうと様子を伺ってみると、後ろの方の席に座った上月さんと目線が合った。そしてその瞬間、ウインクを返されたのだ。どうやらまた僕は、上月さんに助けってもらったらしい。

そんなサポートもあつて僕の自己紹介が何とか終わり、朝礼が始まった。

僕は先生に言われた通り、教室の窓側で一番後ろの席に座った。偶然なのか、僕の前の席には上月さんが座っていた。

「あ、七瀬君、後ろの席だね。これから楽しくなるね。」

僕は顔を真っ赤にしてしまいそうな位に照れて、思わず鞆で顔を隠した。上月さんは近くで見ると、やっぱりとても可愛くて、僕は視線を合わせることが中々できなかった。

それでも、プリントを受けとる度に目が遭うので、妙に恥ずかしい。それに、

「わからない事があつたら、何でも聞いてね？」

何て言われてしまって、いつの間にか手取り足取り面倒を見てもらっている。そういえば、部屋に入る時もみんなと打ち解けやすくしてくれたのではないだろうか。

僕の心に、上月さんへの感謝が一杯に溢れていた。

そして上月さんは、一日中、会ったばかりの僕に積極的に話しかけてくれていた。

「七瀬君さ、勉強は得意？」

「勉強は、少しは得意ですよ？」

「やった、これからは七瀬君に教えてもらおうと。」

にこにこ微笑む上月さんはこのクラスの中心人物らしく、僕の周りには自然と人が多く集まっていた。その中で緊張しながら、僕はびくびくと震えていた。

でも、マイさんに言われた、笑顔で居ることは絶やさなかった。

それだけしていれば、何とかなる様な気がしたからだ。

「あたし、ちよつと用事思い出しちゃった。」

そう言つて、上月さんが席を立った。

「そうなんですか？ 僕に構わないでどうぞ。」

「ごめんね？ 七瀬君、すぐもどるから。」

すごく申し訳なさそうな表情をした後、上月さんは教室を出て行った。すると、その場に僕と数人のクラスメイトが残された。

「七瀬君、君、里桜のお気に入りだね？」

「そうそう、あんなに一人だけに構う里桜見たことないもん、転校生なのにすごいよ」

「お前、羨ましすぎるぞ……」

「そ、そうでしょうか……そんな事は……」

急な展開に僕は追いつくことができなかった。僕の事を上月さんが気に入っているなんて事が、本当にあるんだろうか。

僕が色々と、ぐるぐる考えている最中も、クラスメイト達は口々に、上月さんと僕をあれこれ言っている。

会って数時間でしかないのに、本当にそんな事あるんだろうか

って何本気になってるんだよ僕は。こういうのは、多分、冗談だよ、冗談。だって、そんな事があるはずが……

「七瀬君、みんなと何の話してたの？」

「いえ、何でもありません……、ざ、雑談です、雑談」

「ふん、そっか。私も雑談する」

結局、授業が終わる度に話をして、僕は喋りつかれるほどに口を動かしていた。

授業に関しては、以前受けた授業と似通っていて、僕は自然と答えがわかっていった。同じ勉強を二度するという不思議な体験をしながらも、僕は充実した学校生活を送った。

意外と何とかなるものだなと思い、僕はいつの間にかこのクラスが居心地良くなっていった。

でも、これはマイさんと、上月さんのお陰なのかもしれない。それがなかったら、また前と同じ様な事になっていたかもしれない。二人には感謝しないと。

そして全ての授業が終わり、下校時間になった。数人のクラスメイトに挨拶をして僕は教室を出る。

でもその前に、僕は誰かに肩をつかまれた。

「あい？」

「またも驚きのあまり、奇声をあげてしまう僕。振り返ると、クラスメイトと思われる男が笑顔で立っていた。今日は話したことの無い人だった。」

「よう、転校生くん。家に帰るにはまだ早いだろ、ちょっと俺と話していかないか？」

「陽気な口ぶりで話して、僕の肩を揺らした。」

「急な提案に驚きながらも、僕はこの後に何も予定が入っていない事を考えて、OKを出すことにした。どうせ時間があるなら、色々な人と話しておくべきだろう。」

「いいですよ。どこで話しますか？」

「屋上がいいな、大事な話だからさ」

「そう言った名前もわからないクラスメイトは、すたすたと屋上に向って歩いていった。僕は一步後ろをついていく。」

「他のクラスの生徒たちが、僕を物珍しそうな顔で見てる。」

「たくさんの生徒で溢れ返った廊下は、昨夜通った風景とは全く違っていてたくさん活気に満ちていた。明るい声や、騒がしい音が響き渡っている。」

「そうだ。この学校にはAクラスしか無い訳じゃない。他のクラスの人ともどうにか交流できたらいいな。僕はのんきにそんな事を考えていた。」

「いつの間にか屋上に着いていた。昨夜と同じには思えない程のきれいな風景が、フェンス越しに広がっている。」

「俺は真島洋ましま・ひろし。初登校の感想はどうだった？」

「こざつぱりとした短髪をした真島君は、フェンス近くの段差に腰を下ろした。少しだけ茶色に染めた髪色が特徴的で、活発な印象を感じさせた。」

「楽しかったです、クラスのみんなも優しくしてくれて、何とかなりそうだなって……」

「何とかかなりそうねえ……それは良かった」

にやけて頬を掻く真島君。何が面白いのだろうと思ひながら、僕は彼に合わせる様に笑った。

「俺はね、君に言っておきたい事があるんだよ」

急に色変わりした声で話す真島君に、作っていた笑顔が少し崩れた。その声が放たれるたびに、次第に二人の間に緊張が張り詰めていく。

「七瀬君、君は上月里桜に目を付けられている、って言ったら驚くか？」

真島君は僕に人差し指を向けると同時にそう言った。ドクンツと心臓が脈を打つ。

「目をつけられているって、一体どういう」

僕の質問に首筋を掻く真島君。痒みが取れたのか、きりっとした目つきでこう言った。

「簡単に言つと、近い将来、君は上月にパシリとして使われる運命にある、という事なんだよ」

「近い将来、パシリ、運命、ですか……」

淡々と述べられた言葉に、僕ははあと相槌を打った。というか、急に途方もない話をされたら、誰だってそうなると思う。僕は並んだ言葉を確かめるように反芻した。

「君がそういう態度になるのも無理はないね。だからこそ言つんだ、少しずつでいい。上月と距離をとるべきだ。そうすれば君を諦めて別のターゲットを探さだろうから」

わかったか？ とでも言っている様な顔の真島君は、ポケットに手をつっ込んだ。

彼は何を言ったのだろう。彼が言っているのは、上月さんは悪者で僕を使えばしりにしようとしている、という事だろうか。何故そう思うのか、理由がわからない。

「ちよつと待つてください……上月さんが本当にそんな事をすると思っっているんですか？」

「なんだ、まだ信じてくれないのか。思っているというより、俺は

確信しているんだよ」

何を根拠に……僕はそう思いながら、真島君の話の話を聞くことにした。

「今は餌付けの段階なんだよ。君に対しての好意を受けて、安心させた後に上月の策略が始まるんだ。最初は授業のわからない事をよく聞いてくるだろう。でもそれが、どんどんエスカレートしていくんだぜ？ 怖いだろう？」

確かに、勉強を教える約束はしたけど、それだけでは判断できないと思う。

「でも、僕は上月さんに感謝してるんです、そんな風に思えませんか……」

「それが狙いなんだよ。俺は嘘は絶対に言わない。だからこそ、今ここにいる」

そこまで言い切られると、さすがに上月さんの事を少し疑ってしまう。何の自信があるのか分からないけれど、真島君は、それが真実だと思っているようだった。

「七瀬君、気づいていないかも知れないけどね、クラスでは上月がリーダーだ。逆らったら多分、このクラスから拒絶されるだろう」  
思わず、エツと言ってしまった。どういう事だろう。さつきは離れていけって言ったのに。

「最善は逆らわず、近づかずだ。ここで生きたかったら、最高の注意をして上月に接したほうがいい。それだけは覚えておいてくれな  
いか？」

僕は完璧に納得はしていなかったけど、真島君の気持ちを汲んで、注意する事だけは忘れないようにしようと思った。

言いたいことがなくなったのか、真島君が歩いていく。

「わかりました……でも、何で僕に色々教えてくれたんですか？」  
すると、真島君は足を止めた。

「これ以上、被害者を出したくないんだよ、俺は。知りたいことがあつたら、何でも気軽に言ってくれよ」

そう言つて手を振りながら、真島君は屋上を去つて行つた。  
一人だけになつた屋上で、僕は真島君が座つていた段差に腰掛けた。

彼が言つた事は本当なのだろうか。今の僕には判断できなかった。あれだけ親切にしてくれたのに、それが僕をパシリにする為だとはあまり考えられない。むしろ、そんな事を考えるのは失礼とも言えるかも知れない。

さつきまでの清々しい気持ちはいつの間にか薄れていて、今はどんよりと固まつた雨雲が、腹の中で膨らみ続けている。

僕はそのまま、考え事をしながらゴーグルを外した。

画面には、小さな雲が浮かぶ青空が移っていた。

## プロローグ「僕は自己紹介をする」下

それからの数日、僕は何の変哲も無い学校生活を送った。

数日前には考えられない様な、何の変化も無く、ゆるやかで、落ち着ける環境。そんな日常に埋もれて、僕は数日を過ごしていた。

それは暖かで、僕が欲していた学校生活そのものだったんだ。

それが、ふとした気の緩みから変質したのが今日だった。

今日は運命の日だった。

学校生活にも慣れた僕は、いつもの様に起床しいつもの様に朝食を摂って登校した。

そして学校に着いて、僕はぎこちないながらもクラスメイトに挨拶をして、目の前の席の上月さんに挨拶をして、席に着いた。

「おはよ〜七瀬君、そろそろ学校にも慣れた？」

「はい、一週間経ったら、多分完璧です、多分」

「自信持っていていいんじゃないかな〜。もう七瀬君はクラスの一員じゃない」

渡良瀬先生が入ってくると、先生来ちゃったね、と言って上月さんは前に向き直った。

僕はいつの間にか、登校することがとても楽しみになっていた。

それは学校に通えるという事もそうだけど、特に上月さんに会えることをとても楽しみにしていた。

数日前に言われた事を思い出す。真島君の言ったとおりの事は、今のところ起こっていない。今では、そんな事はほんのたまに気にする程度の事になっていた。

それほどまでに、僕は油断していたんだ。

一時間目は国語の授業だった。内容は森鷗外の舞姫で僕はその名前を聞いた時に、マイさんの事を思い出していた。今まで思い出せなかったのも失礼な話だけど、それにも理由があるのだ。

今日まで、同じ学校に通っている筈のマイさんに、僕は一度も会っていなかったからだ。

同じクラスでは無いにしても、同じ学校に通っていたらいつかは会えるだろうと思っていた。そして、もし会えたなら今の状況を話して、あなたのお陰でクラスに馴染めましたと、伝えたかった。

マイさんの事を思い出すと、僕は授業の事が頭に入らなくなっていた。

「七瀬君、プリントだよ。おーい聞こえてる？」

はっとして顔を上げると、上月さんがにこにこしながらプリントを指で摘んで揺らしていた。

「あ、すいません、ちょっと考え事してて」

「悩み事があるなら、いつでもいいだよ？ 相談に乗るからさ」

上月さんなら、マイさんの事を知っているだろうか。

「あの」

「じゃあ次、上月！ 転校生の世話はもうそろそろいいだろ？」

「はい、すいませ〜ん」

とぼけた様子の上月さんの態度に、くすくすと笑うクラスメイト達。僕は笑いを抑えながら、上月さんに心の中で謝った。

そうだ、真島君に聞いてみようか。わからない事があつたら何でも聞いてくれて言つてたし、上月さんに他の女子生徒の事を聞くのも、何か失礼な気がする。

そう決めた僕は、次の休憩時間に早速真島君に聞きに行った。

それが平穩の終わりを確定させたんだ。

「七瀬君、何で知ってるんだ いや、そんな事はどうでもいい、その言葉をここで出さないでくれ……頼む」

僕がマイさんの事を聞くと、真島君は脅えたような態度で壁にもたれかかった。

「え、あ、あの、僕が何か変なことを言いましたか？ ただマイさん……」「やめろっ！……」

廊下に真島君の拒絶の言葉がじんわりと響いた。でもそんな態度

をされる理由が、僕にはわからなかった。何でも聞いてくれと言ったのは、彼ではなかったか。

「タブーなんだ、彼女の事を話すことは。このクラスのタブーで、学校でも極力避けたほうがいい。上月には特に言っては駄目だ。それほどのを、君は今、言葉にしたんだよ」

小さな声で、僕に耳打ちする真島君。タブー、マイさんの事が禁句になっている、彼はそう言った。しかも上月さんの名前がまたしても出てきた。特に駄目ってどういう……

「じゃあ、真島君以外の誰に聞いても、教えてくれないっていう事ですか？」

「教えてくれるどころか、君はこのクラスにいらなくなるんだぞ！　そこまでして、君は彼女の事を知りたいのか？」

僕の肩を掴んで揺らす真島君。彼の指は強く肩に食い込んで、僕は顔をしかめた。

「クラスにいらなくなるのは嫌ですけど、僕はその人にお礼を言いたくて……」

「七瀬君、誰にお礼を言いたいのか？」

「こ、上月！？」

僕は声のした方に振向くと、にこにここと笑顔を湛えた上月さんが居た。心臓がドキリと脈打つ。そしてさっきまで肩を掴んでいた真島君は、僕の肩を放して、いつの間にかどこかに行ってしまった。た。

「ね、真島君と何の話してたの？　お礼ってなに？」

「え、あと……その……」

言葉がつかえて出てこない。さっきは気軽に聞こうとした事が、今は鉛の様な重量感を持っていて喉から出てこない。軽く掌が震えている。何故だろうか。

「ねえ、何の話？」

上月さんの顔を改めてよく見る。目は笑っている。口はにこりとしている。でも、纏う空気が違った。いつもの上月さんの持ってい

る、ほんわかとした穏やかな空気はどこにもない。

例えるなら、真冬の地面を這う、凍てついた冷気。それが僕と上月さんを包んでいた。

「さつき、話していた、ことは」

口が動きそうになる。嘘をつけない。何らかの暗示を受けたかのように、僕は口を開こうとしている。言っては駄目だ。言ったら全てが終わる。ここは嘘をつくんだ。

「七瀬君は、マイさんって言ってたわよ？」

僕と、上月さんではない。僕の後ろにいた、誰かの声がそう言った。

凍った空気が、音を出して崩れていく。それを僕は感じていた。もう戻ることはできない。

少しずつ身体を傾けて、声の主を確認する。

「か、加藤さん？」

同じクラスメイトだが、初登校の日にしか話したことのない、加藤さんがそこに立っていた。

「奈緒子、それ本当？」

さつきまで固まっていた上月さんが声をあげる。表面は明るいけど、底冷えした声だった。背筋が凍って、僕は振り返った姿勢のまま体が動かない。上月さんの顔を見る勇気がない。

「本当よ？ 何だかマイさんの事を探しているみたいだったわ」

「へえ、そうだったんだ。それで、マイさんにお礼が言いたいんだ」  
観念して前を向いた。予想した表情と違い、上月さんは笑っていた。それが逆に落ち着かない。

「何でそんな顔してるの？ 七瀬君、もう授業始まるからもどろ？」

「は、はい」

言葉と態度は何も変わっていない。それでも僕は、上月さんをさつきまでと同じ様に見ることができなくなっていた。全くの別人、異質な存在。それが僕の目の前の席にいた。

落ち着かない状態、それが授業中も休憩中もずっと続いて、僕は

胃が締められている様な感覚を覚えた。体が震える、周りにいる全員が、僕に敵意を持っているように感じてしまう。

最後の授業が終わった。これで家に帰れる。

この悪い夢も、もう終わる。早く家に帰って、この夢を無くしてしまいたい。そして睡眠をとって、全て忘れたら、また元の暖かなクラスに戻る。

そんな幻想を抱いていた。

そしてその幻想は、帰りの会が終わろうとした瞬間に、脆く崩れ去った。

「風紀委員の上月です。今日、クラスメイトからの除名裁判要請があったので、その権利を発動したいと思います」

急に席を立った上月さん。目の前で、僕には意味のわからない言葉が次々と吐き出された。

いつもの話し方と違う、落ち着いていて、力強い、そして威圧的な口調。

「そ、そうか、上月続けていいぞ？」

脅えた様な態度の渡良瀬先生が促した。

「名前は伏せますが、あるクラスメイトが転校生の七瀬君からの継続的な嫌がらせを受けたという事です。詳細は、後ほど伝えさせてもらいますが、この事実はクラス全員周知の事実であり、全員の意思は同じで、議論の余地はありません」

僕が、あるクラスメイトに嫌がらせ？ 上月さんは何を言っているんだろう。僕はそんな事はしていない、嘘なのは明白だ。僕は何故そんな事を言われている。

「お、おう、そうか。でもな、一応決まりだから決は採らせてもらうぞ？」

「どっぞ」

そう言って座る上月さん。

今から何が始まるうとしているのか、全く判断できない。僕が混乱している内に、先生が拳手を取り始めた。

「七瀬の嫌がらせを見たというやつは、手を挙げる？」

誰も手を挙げない、と思ったのは僕の願望だった。全員が練習したかの様な動作で、一斉に手を挙げる。真っ直ぐに伸びた肘が、模範生徒のそれを思わせる。普段の力の入っていない、だらけた拳手とは違う、垂直に伸びた腕。

それは兵隊の持つ槍を思い起こさせる。指揮官の前に整列した、兵隊。

僕は、一人その矛先を向けられていた。団体の中で、一人だけ僕は手を挙げていなかった。

「それでは決定、だな。七瀬空也をこのクラスから除名する、クラスの移動は明日からだ、以上、帰りの会を終了する！」

「起立、礼、さようなら」

その合図を機に、生徒達がようやく口を開き始めた。活気に満ちた教室、無駄話をして笑いあう生徒がいて、クラスから出て行く生徒がいて、僕の事を見ている生徒もいた。

そして、誰も彼もが僕に話しかけてくる事はなかった。

昨日までとは違う、異質な空間が目の前にある。ああ、これは一年前のあの時と一緒だ。

僕は、このクラスの空気になったのだ。誰も、僕の事を感じなくなる。

どこにもいないかの様に扱われる。

頭が痛くなる、それに耐え切れなくなった僕は、ゴーグルを外して机の上に叩きつけた。

「違う、僕は、僕は何もしていないんだ……」

画面に映っているのは、机の木目だけだ。慌てて下校ボタンをクリックする。

そうすると画面は消えて、スケジュール画面に戻る。そこでやっとため息をついた。

何が理由で、何が変わってしまったのか想像もできない。

ただわかるのは、僕はタブーを犯してしまったという事だけ。そ

れが原因で僕はクラスから除名される事になったのだ。

除名、それはどういう意味なのだろう。

クラスの移動と、先生は言っていた。僕はどこかに移動させられるのだろうか。ふと、裏登校をした時に見つけた、W組というのを思い出す。他のクラスからかけ離れたアルファベットを持つそのクラスは、僕が移動するのにぴったりではないだろうか。

そこまで考えて、僕はベッドに沈んだ。何も考えたくない、明日は必ず来る。学校に行かないという選択肢はまだ存在する。

でも、クラスの移動をしたら、もしかしたらそこは馴染める空間なのかも知れない。

そんな僅かな希望を抱いて、僕は眠りについた。

こうして、僕の本当の学校生活が始まった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6681g/>

---

ペルソネル スケープゴート

2010年12月28日02時48分発行